

## 講習会のお知らせ

□お正月リース作り□

日時 12月14日(日)  
午後1～3時

講師 野の花 り沙  
古川りさ子さん

定員 30名

材料費 1200円

持ち物 新聞紙、ハサミ  
おてふき

Hello!

11月12日旭川市動物園  
よりエゾリス4匹が寄贈  
されました。

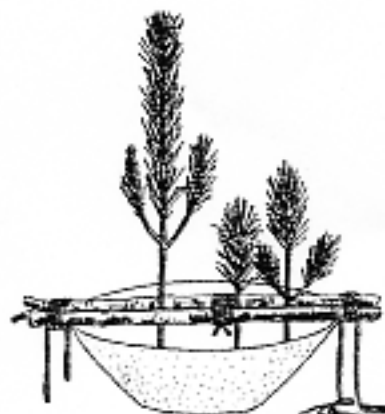
緑の相談所横の小屋で元氣  
に走りまわっています。  
クルミ、カボチャのタネ、クリ  
など届けていただけると  
うれしいです。  
どうぞよろしく・・・

## 【お正月飾り】

大鉢に脇枝をはらった枝を2本渡し、両端を針金で結びます。  
2本の枝の間に若松をさして和ひもをかけ、両端はゆるやかに垂らします。  
若松の緑に和ひもの彩りが映えて格調高い飾りになります。

## ◆おもな正月花材◆

- (枝もの) マツ、タケ、ウメ、センリョウ、  
マンリョウ、ナンテン、ユキヤナギ、  
ヤナギ、ロウバイ、ウメモドキ、  
ツバキ、ボケ、キンカン、ユズなど。
- (花もの) キク、バラ、スイセン、ユリ、ラン  
アンスリウム、ストレリチア、ハボ  
タン、フクジュソウ、ナノハナ、  
オモトなど。



# Q シクラメンの花を来年も 楽しむための秘訣は？

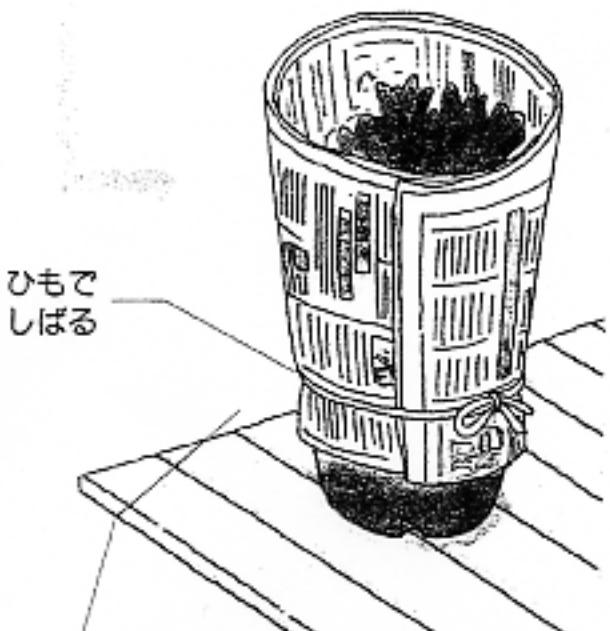
**A** 冬の室内では日当たりのよい窓辺に置き、水を切らさないようにしてください。とくに暖房による土の乾きが激しく、一度しおれるとかなりのダメージになります。しおれた時は新聞紙にくるみ、霧を吹いて風呂のふたの上など湿度の高いところにおくと一晩で回復します。

暖かい日は外気に当て、月に1回ハイポネックスなどの1000倍液を根まわりに与えます。夏は涼しい場所に置き、水やりも控えましょう。

植え替えは8月下旬に。古い土と腐った古根をとって、ひとまわり大きな鉢に植え、水やりを再開します。

9月に室内に入れると、11月ごろから咲き出します。

## ●シクラメンの株の再生法



新聞紙を2枚重ねてくるみ、霧を吹いて風呂のふたに乗せておく

## ●シクラメンの水やり



## ●シクラメンの植え替え(8月下旬)

用土(赤玉土7、腐葉土3)、配合化成肥料ひとつまみ  
深植えしないこと(球根の3分の2は地上に出す)。深植えすると、花が咲くのが遅くなる

古い土と腐った根は取り除く



# ナス科の話

野菜でお馴染みのナスで代表されるナス科の植物には、食用や観賞用として身近なところで利用されているものがたくさんあります。ジャガイモ、トマト、ピーマン等の野菜類、観賞用では花壇に用いられるペチュニアや鉢物になるホオズキ、フユサンゴ、またこの頃評判が悪くなったタバコもナス科です。

## ナス

日本の代表的な野菜ですが元々はインド原産の低木状の多年草です、平安時代に日本に渡り長年の改良の結果現在の大小色々な形のナスになりました。これほど昔から馴染みのある野菜は他になく、よほど日本人の口に合い美味しかったのでしょう。

実の色は紫が普通ですが白や緑もあり、近縁には赤い実を着けるものもあります。この頃は土から入る病気のため作り方が難しくなって来ました、残念なことです。

## トウガラシ

辛味の強いナンバン、辛くないシシトウ、料理の材料ピーマン、観賞用の5色トウガラシ等、これも変化に富む利用の広いナス科の植物です。実の色は乳白色から赤、黄、濃緑、どれも鮮やかで料理で煮ても焼いても色が変わりません。

ナンバンの最も辛いのは種の着いている壁の部分、またピーマンには肉厚で甘味があり赤や黄色の生食もできる種類もあり利用も広がりました。

## ペチュニア

朝顔の花に似た花壇用として以前から人気のある草花で、品種改良の結果今では色とりどりの花が楽しめます。かつては不可能とされていた、まいた種が全部八重咲になるという花の種を作り出したことで、日本の育種技術の高さを世界に示した記念の花でもあります。この頃人気のサフィニアもこの仲間です。

花の期間が長く花壇には最適ですが、這うように茎をのばし少し刈り込めば沢山の花を着けますので釣り鉢、棚のうえに置くプランター等でも楽しめます。

## フユサンゴ

鉢植えでヒメダイダイ、タマサンゴ等の別名で知られておりますが、秋遅くなって可愛いミニトマトのような赤い実をたくさんつけて楽しませてくれますが、この実は食べられません。

もともとはブラジル原産のこれもナス科の常緑低木です。寒さに注意し秋から冬は室内で、夏には戸外で上手に育てれば毎年サンゴ玉のような実をみる事ができますし、春になってから挿し木で増やすことも容易です。

## ダツラ

チョウセンアサガオですが、最近この中の1種をエンジェルランベットという名でよく見かけるようになりました。花は淡黄色で名のとおり長さ20cm以上のランベットの形で多数の花をぶら下げた株をみると見事なものです。寒いこの地方でも冬は室内で越冬させれば年中続けて咲かせることも可能です。

またこの仲間の花を曼陀羅華といい、江戸時代華岡青洲が日本で初めて麻酔薬として手術に利用した植物としても知られております。

植物も生き物ですから食べ物が必要ですが、動物が他の生き物を食べて生きているのにたいして、程度の差はありますが自分で作り出した食べ物を利用するところが植物の特色です。このような生き物を「自家栄養生物」といいます。食べ物をつくり出すには原料が必要です。ご存知のように植物は水と空気と光から食べ物の大部分をつくり出していますが、水の中にいろいろな原料が混じっているとより美味しく、変化に富んだ栄養価の高い食べ物をつくり出す事ができ、体を丈夫にしたり、花を咲かせたり、実を实らせたりする事ができるのです。つまり植物がつくり出す自分の食べ物の付加価値を高める添加物が肥料分なのです。

植物が食べ物をつくり出すための原料として大量に必要とするのは、窒素・磷酸・加里(N・P・K)で肥料の三要素と呼んでいます。この他にもカルシウム・鉄・マグネシウムなど7つの要素を加えて十大要素と呼ぶ事もあります。私達もミネラルやビタミンが必要なと同じように、植物の食べ物の中にも量は少なくても無いと困る微量要素と呼ばれるものが数多くあり、これらを含めて一般に栄養素と呼んでいます。これが、肥料分ということになります。

さて、われわれが植物を育てるときに肥料を与えるのは何故でしょうか？

「それは、肥料をやると植物が元気に成長するからでしょう！」

では、野山の植物は肥料ももらわないのに元気にしているのは何故でしょう？

山葡萄は肥料を貰わずに実をつけます。山の櫻は肥料を貰わずに花を咲かせます。川辺の蔦は肥料を貰わずに高々と生い茂ります。これらの植物達だって食べ物をつくるための原料は同じなのに、何故畑の野菜や鉢植えの花、庭の百合やツツジだけが肥料を貰うのでしょうか。それは人間が関与すると、植物の体は土に帰っていく機会を失うか、あるいはその機会が極端に少なくなるからなのです。通常、自然の植物は、役目の終わった体の一部や全部を大地に戻し微生物により分解されて腐植として蓄積されます。腐植の中には植物の食べ物である養分、つまり肥料と同じ成分が蓄えられており、これが連続的に供給されて植物達は生きています。つまり、リサイクルの機能が健全に働いている自然では人間が肥料を与える必要がないのです。肥料は自然からかけ離れたところで植物を育てるための一つの手段なのです。

肥料をやるのが好きな人が居て、いつも鉢の上に肥料が置かれているのを見かける事がありますが、肥料は足りないものを必要なときに補給するもので、人間の欲のように蓄えて置くためのものではありませんから、これは感心しません。また、肥料の中味は植物の一生を左右します。生育段階や体調に応じ、周りの環境に応じた中味や量を文字どおり匙加減する必要があり、匙加減を違えるとやらないより悪いという結果になります。人間が考え出した肥料ですが、施すときは植物の身になってやるのが肝要です。

肥料の中味と植物の関わりについては次号にゆずります。